

「伊香保―万葉に歌われたふるさと」

群馬県立女子大学 北川 和 秀

1. 「伊香保」をよんだ歌『万葉集』卷十四東歌（上野国）
 - ① 伊香保ろに天雲い継ぎかぬまづく人とおたはふいざ寝しめとら（三四〇九）
 - ② 伊香保ろの岨の榛原ねもころに将来をなかねそ現在し善かば（三四一〇）
 - ③ 伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の頭ろまでもさ寝をさ寝てば（三四一四）
 - ④ 上毛野伊香保の沼に植ゑ小水葱かく恋ひむとや種求めむ（三四一五）
 - ⑤ 伊香保せよ奈可中次下思ひどろ隈こそしつと忘れせなふも（三四一九）
 - ⑥ 伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ（三四二一）
 - ⑦ 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり（三四二二）
 - ⑧ 上毛野伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり（三四二三）
 - ⑨ 伊香保ろの岨の榛原吾が衣に着きよらしもよひたへと思へば（三四三五）

2. 「伊香保」の語源

- ・現在の「伊香保」は渋川市の町名。旧伊香保町。
- ・万葉集の時代の「伊香保」は榛名山のこと。
- ・「いかほ」という語の構成は「いか（厳）＋ほ（穂・秀）」と考えられる。
- ・「ほ（穂・秀）」は、突き出ているもの、他からぬきんでているもの。例えば、稲穂、槍の穂、波の穂などの「穂」。「炎（ほのほ）」は「火の穂」の意。ろうそくの炎の形は槍の穂とよく似ている。山の名には「高千穂」「穂高」など「ほ」の付くものがある。「いかほ」の「ほ」も同じと考えてよい。
- ・「いか（厳）」は「内部の力が充実していて、その力が外形に角張って見えている状態」（『古典基礎語辞典』の「いかづち【雷】」の項）を表す語で、「いかし（厳し）」「いかめし（厳めし）」「いかる（怒る）」「いかづち（雷）」などの「いか」も同じ。
- ・「いかほ」の「いか（厳）」は、この山のもつどのような性格を「いか（厳）」ととらえたのであろうか。

・山の姿
・雷の巣窟
・火山

★「伊香保」をアイヌ語のイカボツプ《熱くたぎる湯》から来ているとするのは不可。

3. 伊香保の周辺をよんだ可能性のある歌『万葉集』卷十四東歌（上野国・未勘国）
 - ⑩ 上毛野可保夜が沼のいはる蔓引かばぬれつつ吾をな絶えそね（三四一六） 上野国
 - ⑪ 子持山若鷄冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何どか思ふ（三四九四） 未勘国

⑫ 左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ (三五四〇) 未勘国

4. 『延喜式』神名帳の上野国の条 (そのうち一部)

上野国十二座 大三座
小九座

……

甘楽郡二座 大一座
小一座

貫前神社 大神
宇藝神社

群馬郡三座 大一座
小二座

伊加保神社 大神
榛名神社 甲波宿禰神社

勢多郡一座 大

赤城神社 大神

……

5. 伊香保等の歌をよむ

⑥ 伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ (三四二一)

(伊香保の峰に雷よ鳴ってくれるな。私にとっては別にどうということはないけれども、あの娘が怖がるものでね)

⑦ 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり (三四二二)

(伊香保風は、吹く日も吹かない日もあると言うが、私があるあなたを思う恋心ばかりは止むときがないことだ)

*参考 「韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし」 (3670)
「荒津の海潮干潮満ち時はあれどいづれの時か我が恋ひざらむ」 (3891)

⑧ 上毛野伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり (三四二三)

(上野国の伊香保の峰に降る「雪」ではないが、たやすく「行き」過ぎることができない、あなたの家のあたりよ)

*参考 「わが屋戸の君松の木に降る雪の行きには行かじ待ちにし待たむ」 (1041)

③ 伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の踰るまでもさ寝をさ寝てば (三四一四)

(伊香保の高い井堰の上に現れる虹がはつきりと見えるように、そのようにはつきりと二人の仲が明らかになってしまふほど一緒に寝ていられたらなあ)

④ 上毛野伊香保の沼に植ゑ小水葱かく恋ひむとや種求めけむ (三四一五)

(上野国の伊香保の沼に植えている小水葱ではないけれど、私はこんなに恋に苦しもうとして、わざわざ種(原因)を求めたのだったかなあ)

⑩ 子持山若鷄冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何どか思ふ（三四九四）

（子持山の若いカエデの葉が秋になって色づくまで、あなたと共寝をしていたと思
う。あなたは どう思う？）

⑪ 上毛野可保夜が沼のいはる蔓引かばぬれつつ吾をな絶えそね（三四一六）

（上野国の可保夜の沼のイハヰツラは、引っ張ればずると寄って来るように、私
に寄ってきて、いつまでも仲を絶やさないうで欲しい）

*参考「入間路の大家が原のいはる蔓引かばぬるぬる吾にな絶えそね」（3378）

武蔵国東歌

西の方はるかに川嶋と聞えて、こゝにも甲波すくねの社を見やりたるは、これなん光
明院がつかさどれるなりけり。うのとしのわざはひに、其地さへながれうせて、その
社は南の方三四町ばかりひきしりぞきて作りたてたとぞ。…名に高きかほやが沼
も、むかしこの境内に有けるを、近き頃となりては俤すらなくなりしうへ、また其地
さへぞうせはてたる。
（奈佐勝臯『山吹日記』天明六年〔1806〕五月十三日条）

*「うのとしのわざはひ」は天明三年〔1803〕の浅間山の大噴火によってもたらされた災害

○伊波為都良、此は蓴菜の事とはしられたれど其義分がたし、按ふに石井蔓にて元岩
垣沼やうの所に在しをかく云ひそめしにもやあらむ『ぬなは』といふも水中に生ひて
滑なる蔓草ゆゑ『ぬる／＼繩』の義にて同し物も所によりて名のかはりたるにて…
…沼繩も石居蔓もたはみづらも同じにて皆蓴菜の事とすべし【此頃出羽国米沢人明井
水麻呂てふ学士訪ひ来て云く、むさしの国入間郡の辺りにては今も蓴をいはづらとい
ふといはれき】
（橋本直香『上野歌解』安政年間1854～1859）

⑫ 左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ（三五四〇）

（左和多里の乙女に出逢ったけれど、私が乗る赤毛の馬の歩みが速いので、言葉を交
わさないまま来てしまった）

*沢渡神社に万葉歌碑あり

沢渡のいで湯にいづ。四万より四里半とぞいふなる。ここにもゆあみする人つどへり。
伊香保より草津へのゆきかひにはかならずやどる所なれば夜はわきてにぎはへり。薬

師のみ堂にまうでて見れば万葉集なる

左和多里能手児尔伊由伎安比安可故麻我

安我伎乎波夜美許等登波受伎奴

と云歌を石にゑりて立たり。ここと定たるはたしかなる証ありてにや。

（富田永世『上毛温泉廻』文政十一年1828）『上毛及上毛人』11・12所収



6. 伊香保の万葉歌碑（旧伊香保町（現在は渋川市に含まれる）が昭和五十七年に建てたもので、揮毫は伊勢崎市出身の佐々木心華氏）